

# 哲学対話の成り立ちとその意義

## －生成という視点から－

The Structure and Significance of a Philosophical Dialogue:  
from the Perspective of Generation

日高 直保 (大同大学 教養部)

### 【要旨】

本研究は、哲学対話という実践について、具体的な事例をもとに、その成り立ちと意義を明らかにすることを目的とした。研究の結果、哲学対話においては、安心感や自由さを感じさせる空間が生み出される中で、対話の流れが生成されうると考えられた。また、様々な水準での対話において、個人に気づきや新しい考えがもたらされるだけでなく、対話の中で表明された個人の考えが変奏、肉付けされることで、個人の範囲を超えた新しい考えの生成も生じることが示された。また、哲学対話の意義として、哲学対話が、社会およびそこで生じている問題について考えることを可能にするだけでなく、それを解決する上での重要なポイントとなるような新しい考えの生成をもたらしうる点を指摘した。加えて、新しい考えの生成が、より良い社会の実現に向けた第一歩ともなりうる点も、哲学対話の意義ではないかと考えられた。

The purpose of this study was to clarify the structure and significance of the practice of philosophical dialogue, based on specific cases. As a result of this study, it was considered that, in philosophical dialogue, a flow of dialogue can be generated in a space where a sense of security and freedom has been established. In addition, it was shown that dialogue at various levels provides for the development of greater awareness and a shared understanding, thus allowing for a collaborative environment beyond the scope of the individual through the exchange and fleshing out of ideas. Thus, the significance of philosophical dialogue is that it makes it possible to think about society and the issues at hand while simultaneously providing a sounding board for new ideas and potential solutions in moving forward. In this way, the generation of ideas from philosophical dialogue provides an essential first step toward the realization of a better society.

### 【キーワード】

哲学対話、対話コンポーネンツ、生成、現象学的質的研究

Philosophical Dialogue, Dialogue Complex, Generation, Phenomenological Qualitative Research

## 問題と目的

本研究の目的は、哲学対話という実践について、実際の事例およびデータを分析し、その実践がどのようなものであるか、哲学対話の意義と合わせて考察することである。哲学対話に関する議論は数々あるが、実際の事例に基づき、哲学対話の特徴やその成り立ち、そして意義について論じた研究は少ない。

事例に基づく研究として、哲学対話が学習動機づけに与える影響を論じた三和（2022）らの研究や、哲学対話を授業に組み込む試みについて論じた村瀬（2022）の研究が挙げられる。ただ、どちらも哲学対話に期待される特定の効果や、教育領域における発展可能性を論じたものであり、哲学対話がどのような実践であるかは中心的に論じられていない。教育や医療といった様々な領域で哲学対話が実施され、対話の場が広がりを見せている現在だからこそ、実際の事例をもとに、哲学対話の内実を論じることに意義があると筆者は考える。哲学対話の特徴やその成り立ち、そして意義を明らかにすることは、様々な領域との接続をはじめとした、哲学対話の発展に寄与するのではないだろうか。

また、本研究における哲学対話とは、対話コンポーネンツ（以下、対話コンポと表記）と呼ばれる実践を指す。対話コンポは、2002～2003年に大阪大学で行われた研究プロジェクトにおいて、公共的対話の方法を開発する取り組みがなされる中で開発された（堀江、2017）。より具体的に対話コンポとは、形式が異なる4つの対話からなる実践であり、「社会に生じている問題について、専門家／非専門家を含めた利害・立場・文化的背景の異なる当事者・関係者が話し合い、相互の理解を深め、問題解決のために歩み寄り（堀江、2017）」ことを目標に開発されたプログラムである。対話コンポは、哲学対話を社会に活用することを試みる実践であり、社会に生じている問題について解決策や提言の発信が目指されるなど、独自性を持つ哲学対話である。本邦において対話コンポは、「在宅における医療行為」をテーマに実施されている（中岡・堀江、2004）ものの、実施数が極めて少ない。

対話コンポの流れについて、堀江（2017）の議論をもとに具体的に示していきたい。まず、社会に生じている問題に関わるメインテーマを定め、そのテーマに関する事前調査を行う第0コンポが実施される。そして、第0コンポの内容をもとに別途テーマを設定し、そのテーマに関する論点の枚挙や自由な議論を行うべく、第1コンポが実施される。続いて、第1コンポから抽出されたキーワードをもとに、普遍的な問いを設定し、その問いに関する対話を第2コンポにて行う。この第2コンポでは、参加者の利害関心や役割、立場などを一時的に解除した形での対話が、ソクラティック・ダイアログの形で実施される。そして第3コンポでは、メインテーマについて、それまでの対話内容をふまえて、外部に向けて発信するための対話が行われる。ここで目指されるのが、メインテーマとして設定された問題に関する、解決策や提言の発信である。

本研究では、上に述べた対話コンポ、その中でも特に第3コンポに注目することを通じ、哲学対話の特徴やその成り立ち、そして意義について論じたい。対話コンポは長期間にわたる調査や対話を組み合わせたものであるため、詳細な事例およびデータ分析を行うに際し、その全てを本研究で取り扱うことは難しい。そこで本研究では、中心となるテーマを直接的に取り上げる第3コンポに注目して議論を進めていく。第3コンポは、対話コンポ全体の総括に当たる部分であり、哲学対話の特徴やその成り立ち、および意義を論じ

る上で最適と考えるためである。主に第3コンポに関するデータを分析することを通じて、哲学対話の特徴やその成り立ち、および意義について考察していく。

## 方法

### 1 本研究で取り上げる対話コンポの紹介と、調査方法

本研究における対話コンポは、ライフイベントに関する研究プロジェクトの一環として行われ、妊娠・出産をメインテーマとしていた。妊娠・出産というメインテーマに関するインタビュー調査や不妊治療に関する座談会の実施といった形で、第0・1コンポが実施された。第0・1コンポの内容をふまえ、第2コンポで取り上げる普遍的な問いとして、「ためらうのはなぜ？どんなとき？」という問いが抽出され、第2コンポではその問いに関する対話がなされた。そして、続く第3コンポでは、「ためらい」というテーマおよび第2コンポでの対話内容をふまえ、妊娠・出産というメインテーマについて対話がなされた。第2・3コンポは、ファシリテーターを含め10名ほどのメンバーで、2日間かけ連続的に実施された。参加者の属性は、大学生から教員、会社員など様々であり、年齢も20代～70代まで様々であった。参加者の中には、時間的な都合といった理由から、1日目、あるいは2日目のみの参加となった者もあり、1日目と2日目の参加者数には若干の変動があったが、参加者はほぼ同一メンバーであった。筆者は、第2・3コンポにオブザーバーとして参加していた。

第2・3コンポにおける対話は全て録音され、逐語化されている。本研究では、以上の逐語化された対話の記録をデータと呼ぶ。また、主に第3コンポのデータに注目した分析を行いながら、補足的に第2コンポのデータも参照しつつ、議論を進めていく。

### 2 倫理的配慮

研究協力に際し、北海道大学病院生命・医学系研究倫理審査委員会より承認を得た（研究番号：生021-0181）。また、対話を行うに際しては、参加者全員に同意・説明文書を用いて研究内容の説明を行い、対話内容の録音、記録、および研究での使用について同意を得た。加えて、対話の途中でも参加中止が可能であることを十分に説明し、途中で協力を中止した場合でも、不利益を被ることは無いことを保証した。

### 3 分析方法

データの分析は、村上（2013、2016）による現象学的質的研究の手法をもとに行った。村上（2013、2016）は、語りの内容に加え、語りに見られる様々な特徴を分析することで、語られている行為や経験がどのように成り立っているかを記述している。分析に際しては、語りを繰り返し読み、その内容を把握しつつ、繰り返し用いられる単語や言葉の細かい使用法といった語りの特徴に注目しながら、語られた行為や経験の本質的特徴を描き出すと同時に、それらの結びつきを示すことで、その成り立ちが記述されている。

本研究でも、上記の方法をもとに分析を行った。はじめに、第2・3コンポのデータを逐語化した記録を繰り返し読み、内容を把握した。その上で、重要と考えられる語りを選出し、その語りに関する分析を記述することで、哲学対話の本質的特徴とその成り立ちを示すことを目指した。具体的には、繰り返し登場した言葉や、言葉の使用法といった語

りの特徴に注目しながら、その意味を記述することで哲学対話の本質的特徴を描き出すと同時に、それらの結びつきを示すことで、哲学対話の成り立ちを記述することを試みた。

## 分析結果

本章では、対話コンポのデータについて分析を行なう。以下の記述において、「」が付けられた語句や語りは全て参加者の語りからの引用である。逐語録からの引用部分では、特徴的な語りに下線を引いた。また、語りの省略や補足説明を加えた場合は〔〕内に記載した。

加えて、本研究における生成という言葉について、あらかじめ注記しておきたい。本研究において生成とは、対話の中で、あるいは対話を通じて、なにかが生み出され続けていくことを指し示すための言葉である。生成という言葉は、データを分析する中で得られたキーワードである。本章の分析と考察で繰り返し登場する言葉であるため、あらかじめ意味を明記しておく。

第2コンポでは、「ためらうのはなぜ？どんなとき？」という問いについて、ある事柄に対する選択権を「ボール」にたとえた対話がなされた。そして、「自分の手にリアルなボールがあるときに、持ち続けられるかどうかを自分の意思で決められる」場合、ためらいが生じるのではないかという意見が、参加者全員の共通理解として導かれていた。

本章で主に取り上げる第3コンポは、以上の共通理解をふまえ、ためらいおよび妊娠・出産というテーマについてなされた対話である。

## 1 哲学対話の特徴

### (1) 哲学対話による空間と流れの生成

はじめに、2日目の冒頭、前日の感想を求められた際の参加者の感想を引用する。

Bさん：これは対比する中で気付いたんですけど、すごい話しながら、結構疲れたっていう感想も聞いた中で、私、疲れてないなってことに気が付いたんです。何かすごいリラックスして、家のソファでだらだらしゃべってるかのようにしゃべらせてもらってるこの環境っていうものが、すごい空間だなんていうのを、昨日思っています。

Cさん：私、自分でワークショップをやったりとか、イベントを企画して運営することが多いので、結構主催者側のことが多くて、お客さまにどうやってやったら楽しんでもらえるかなとかいうことを考える立場なので、昨日、すごい楽でした。身を委ねていけばいいんだみたいな感じで、自由に発言させていただけたかなと思う。

Bさんは、自らが参加した対話について、メタファーを用いつつ語っている。この語りでも注目すべきは、「環境」や「空間」といった言葉であろう。哲学対話を通じ生み出されるものは、参加者どうしのやり取りや、それをふまえた考えや思いだけではない。ある独特の、「環境」や「空間」が生成されていくのである。その「環境」や「空間」は、その場が家ではない外の空間であり、さらに家族ではない他者と過ごす空間でありながらも、「家のソファでだらだらしゃべってるかのよう」と参加者に感じさせうるような「空

間」である。

また B さんは、「しゃべらせてもらえてる」という、感謝のニュアンスと思われる表現を用いている。B さんにとって、哲学対話が生成する「空間」が、日常生活の中では見られない、かけがえのない「空間」として感じ取られているのであろう。

続いて C さんは、自らの経験をふまえながら、「すっごい楽」と感想を述べている。対話への参加が「すっごい楽」であった理由の一つは、「身を委ねていればいい」と感じられたことであろう。「身を委ねていればいい」という表現からは、C さんが身を委ねる何かの存在と、その存在に気を許すことができたという事実、そして、身を委ねる行為が持続的に行われていた、というポイントがうかがえる。

哲学対話、あるいは対話という行為そのものは、時間的な流れの中で実現するものであり、文脈性という意味でも流れを持つ。それゆえ、C さんが身を委ねるのは、時間的な流れと文脈という意味での流れ、さらに言えば、両者が織りなす対話の流れであろう。流れは持続するものであるがゆえに、身を委ねる行為も持続的に行われる。

そして、その流れに気を許すことができた、という点もポイントであろう。B さんは、哲学対話において生成される空間が「家のソファ」のようであり、そのかけがえなさを語っていた。その点をふまえれば、C さんも、哲学対話において生成される空間と流れに安心感を見出したからこそ、身を委ねることができたのではないかと推察される。そしてその感覚が、「自由に発言」することに結びついていたのであろう。

哲学対話は、日常から切り離された空間において、「家のソファ」にいるかのように感じさせる空間や、「身を委ねていればいい」と感じさせる流れを生成すると推察される。その独特の空間および流れが、参加者の自由な発言を可能にするのではないだろうか。

## (2) 哲学対話をもたらす気づき

続いて、哲学対話の特徴であると考えられる、気づきという点について論じていきたい。

B さん：妊娠出産に関してボールがあるっていうのは、私、何かすぐぱーってイメージできなかつたんです。できませんでした。でも、1つ絶対あるなって思ったのは、避妊をやめるか、やめないか。積極的につくりに行くか、いかないかっていうのが、私の場合はありました。

S さん：〔妊娠・出産に関するボールを、パートナーと2人で1つ持っている、というイメージを語った後の発言〕何か急速に不安が頭をもたげてきたな。パートナーは果たしてほんとにそうだったのかなっていう。今、〔自身の考えに関する様々な意見を〕言われて、僕はその気持ちを確かめようがないんですけど。

哲学対話は気づきをもたらす。それが大きな特徴の一つと言えるだろう。B さんの語りを見ると、「妊娠出産に関してボールがある」というそれまでの対話内容について、「イメージできなかつた」と語った直後に、「できませんでした」と過去形に表現を改めている。そしてその発言に続き、「1つ絶対あるなって思った」ボール、すなわち「避妊をやめるか、やめないか」の選択に言及している。「妊娠出産に関してボールがある」という、当初はイ

メッセージできなかった対話内容について、対話に身を投じる中で気づきをもたらされ、「1つ絶対ある」と考えるに至ったのであろう。自身がそれまで考えなかったことや理解できなかったことについて、対話の中で新しい考えや理解をもたらされること、これが哲学対話における気づきである。

もう一つ、Sさんの語りにも注目したい。対話の流れの中で、Sさんは「急速に不安が頭をもたげて」くる体験をしている。自身の考えについて、「パートナーは果たしてほんとにそうだったのかな」という新しい気づき、および疑問が生じる中で、「急速に不安が」生じたのであろう。

ここでは、Sさんの語りにおける、「今」という言葉に注目したい。Sさんは、「パートナーは果たしてほんとにそうだったのかな」という新しい疑問に、対話のただ中における「今」気づく。しかし、これまでSさんはそう考えて生活してきたため、「その気持ちを確認しようがない」と「今」考える。哲学対話は、時間および対話の文脈という流れの中で進んでいくものであるが、要所において、その流れにおける「今」というタイミングに参加者を引き戻し、意識を収斂させる特徴があるように思われる。この点については、節を改めて述べる。

### (3) 気づきと「今」への収斂

Cさんの語りを引用するところから、本説を始めたい。

Cさん：〔参加者Iさんの発言を受けて〕今彼女が実感してるっていうことが、やっぱり彼女の全てだから、そこは私たち大人とか、そういう周りの人もちゃんと理解したいなって、今すごく思って、反省すべき部分もたくさんあるよなって思いながらいて、でも、じゃあためらわないで出産とか、少子高齢化を何とか日本が克服するためには、やっぱり彼女のようなトラウマみたいのを、いかに大人たちが解決するかとか、いかに払拭していくかみたいなことはすごく大事なんだろうなって、今思いました。それは、でも、たぶんIちゃんの親御さん1人の力では全然できることではなくって、やっぱり周りの、周囲の人たちの助けだとか、社会全体のことに関わってくるんだろうなっていうのは、今話を聞いてて、よく思いました。

上記の語りでは、「今」という言葉が4回使われている。引用した発言をする前のIさんの発言〔引用した発言の直前というわけではなく、Iさんの発言の後には様々なやり取りが存在した〕を受け、Cさんは、Iさんが「今」どういう状況にいるのか、「ちゃんと理解したい」と「今」思う。そして、「反省すべき部分もたくさんあるよな」と、おそらく自らの過去も振り返りながら、「少子高齢化を何とか日本が克服するために」何が必要かという問いに関する気づきを、「今」得ている。哲学対話は、参加者の意識を「今」へと引き戻す、あるいは収斂させる、といえよう。

上記の特徴を、他のポイントもふまえて論じていきたい。この語りが生み出される背景には、鍵となるIさんの発言だけでなく、他参加者の発言も含めたそれまでの対話内容、そして自らの過去の経験といった、様々な要因が存在していると推察される。哲学対話は参加者が複数いるため、必然的に多声的なものとなる。ただ、哲学対話において生じている

のは、参加者間の対話だけではないだろう。参加者個人において、過去の自分との対話と  
いった形でも、対話が生じていると推察される。参加者との間で、そして参加者個人にお  
いて、さまざまな声が響き合い、それらの声が結びついたり、時には反目したりしながら、  
一つの流れが生み出されていくと同時に、参加者個人において、その流れが「今」もたら  
される気づきに収斂するのではないか。

哲学対話は、気づきという形で、参加者の意識を「今」へと収斂させるともいえよう。  
ここで、「今話を聞いてて、よく思いました」という C さんの語りに注目したい。「話を聞  
いてて」という表現からは、C さんが話を聞くという行為を持続させる中で、気づきを得  
ている様子がうかがえる。言い換えれば、対話の流れに身を委ねる中で、「思い」が醸成さ  
れていったのであり、それが気づきとして明確化したタイミングが「今」なのであろう。  
哲学対話は、その流れに身を投じる参加者に新しい気づきを生じさせることで、その意識  
を「今」へと収斂させるのである。

また、おそらくそのような気づきは、C さんが一人で考えていても得られなかったものな  
のではないだろうか。だからこそ、対話の流れの只中で、気づきを得ること、「今」そのよ  
うに思うことが、参加者にとってかけがえのない体験や、驚きを伴う体験になりうるのだ  
と推察される。

## 2 個人の気づきを超えた考えの生成と、対話の成り立ち

前節では、主に第 3 コンポのデータを分析することを通じ、哲学対話の特徴について論  
じてきた。続く本節では、特に気づきという特徴に注目しながら、哲学対話が個人の気づ  
きを超え、対話を通じてこそ可能になる考えの生成をもたらすことを論じ、対話が成り立  
つ様子を示していきたい。

第 3 コンポにおいては、妊娠・出産において、様々なタイミングで様々なためらいが生  
じうる可能性があると言われた。そして、「ためらいって悪くないというか、ためらうべき」  
なのではないか、という可能性が提示された。以下は、初めてその話題が取り上げられた  
場面の語りである。

E さん：C さんの話聞いてふっと思いついたのは、初めてだったり未知だったりするから  
本能的な不安みたいなのが生じるという、話があったのを思い出して、私、この話を  
昨日〔第 2 コンポ〕聞いた時に、ためらいって悪くないというか、ためらうべきみた  
いなことを思ったんですよ。未知のこととか、初めてのことに踏み出す時にためらいが  
こうやって生じるのは、悪くないことなんじゃないかっていう、今、N さんに代理母の  
時も〔この発言の直前、N さんが代理出産や代理母に関する発言をし、そのテーマに関  
する対話が展開していた〕、ちょっとためらったほうがいいんじゃないかみたいな、何  
だろう、うまく言えないですけど。

E さんは、第 2 コンポの時点で、「ためらいって悪くないというか、ためらうべき」な  
のではないか、という考えを抱いていた。そして、C さんの発言を受け、その考えを「ふっ  
と」思い出す。さらに、C さんの発言に続く N さんの発言および一連の対話内容をふまえ、  
ためらいは「悪くないことなんじゃないか」と E さんは再び考えたのであろう。C さんの

発言と、それに続く N さんの発言や対話が E さんを触発し、過去に抱いた考えを「今」へと蘇らせる。そして E さんは、抱いていた考えを他の参加者と共有すべく、発言という形で提示したのであろう。

この時点では、「うまく言えない」と断片的に示された E さんの考えだが、その後の対話の中で、この考えが少しずつ変奏、肉付けされ、新しい考えに結実していった。ただ、その展開は、この発言がなされた直後に起きたわけではない。引用した語りの直後、話題は別の事柄に転じ、対話が流れていった。しかしながら時折、ためらいは「悪くないことなんじゃないか」、という考えに関する話題が再び取り上げられ、その考えが参加者間の対話の中で変奏、肉付けされながら、新しい考えへと展開していった。

その展開を、具体的に示していきたい。

E さん：妊娠、出産に関する、やっぱ判断みたいになって、子育てとか親になった自分っていうのがくっついて判断するけど、それは未来を思い描く、想像したり、あるいは見えなかったりする中でのあれだから、未来のほうから言っても、今現在のこのためらいはあるっていう、そこをどう、それに私たちは何がし得るかな。あるいは社会なのか、私たちなのか。ためらいを消す方向じゃない〔のではないか〕。

C さん：いや、ためらってもいいんですよ、きっと。

E さん：ためらってもいい。そうそう。

W さん：ためらってもいいんだけど。

C さん：というか、ためらう。ためらえる。

T さん：ためらってもいいけど、その後、飛び込めるような、横に付いてあげるのか、背中押してあげるのか、手引いてあげんのか分かんないけど、あるいは自分で判断する力を付けてあげるのか。

E さん：安心してためらえる社会みたいな。

C さん：新しい。

B さん：そうですね。

以上は、E さんが、妊娠・出産に関するためらいについて、「私たちは〔あるいは社会が〕何がし得るか」と問題提起しながら、やはり「ためらいを消す方向じゃない」のではないかと発言した後の一連の対話である。E さんのはじめの発言は、ためらいは「悪くないことなんじゃないか」という考えと、「私たちは〔あるいは社会が〕何がし得るか」という問いが結びついて生じたものと推察され、前の引用との連続性がうかがえる。

「ためらいを消す方向じゃない」という E さんの発言を受け、C さんは、「いや」と軽い否定とも取れるニュアンスの言葉を挟みながら、「ためらってもいいんですよ、きっと」と、E さんの考えを提示している。「きっと」と、発言に暫定性が付与されているのは、「ためらってもいい」という考えが、対話の流れの中で「ふっと」C さんに生じた気づきであり、C さんも確信を持っているわけではない様子を表しているのであろう。

また、「ためらいを消す方向じゃない」という E さんの考えと、「ためらってもいい」という C さんの考えは、ニュアンスだけでなく意味合いも異なるだろう。それゆえに、E さんの発言は C さんの発言の変奏であるといえよう。妊娠・出産に際し、「ためらい」は悪いも

のではない。ただ、それを「消す」かどうかは問題ではなく、「ためらえる」社会を目指すことが重要なのだ、とCさんは考えたのではないか。そのためCさんは、Eさんの発言をふまえつつも、「いや」と軽い否定で応じ、自らの考えを述べたのだと推察される。

Cさんの考えについては、「そうそう」とEさんが同意を表明する一方で、「ためらってもいいんだけど」と、同意しつつも違和感を表明するような発言がWさんよりなされている。そして今度は、Wさんの発言を受けたTさんが、「ためらってもいいけど」、妊娠・出産についてためらう当事者へのサポートは必要だろう、と自らの考えを述べている。Eさんの考えが、「ためらってもいい」へと変奏されながら、「ためらってもいいけど、その後」のサポートは必要だ、と参加者間の対話を通じて肉付けされているのである。

これら一連の対話の流れを総括するように、Eさんが「安心してためらえる社会みたいな」と発言する。この発言は、Cさんの「ためらえる」という発言に触発されつつ、Wさんの表明した違和感やTさんの考えもふまえ、Eさんがそれまでの対話を総括しようと試みの中で生成された、新しい考えであろう。そしてここでも、この考えは「みたいな」という暫定性を持っている。

この発言に対し、Cさんは「新しい」と応じ、Bさんもそれに同意する。「安心してためらえる社会」という考えは、CさんやBさん個人では気づかなかった考えであり、参加者間の対話を通じてこそ生じ得た可能性が高いため、「新しい」のであろう。ただ、生み出された考えは、対話を通じたさらなる変奏の可能性を持つがゆえ、暫定的でもあり続ける。以上の語りは、対話の中で、個人の気づきや考えを超えた新しい考えが生成される瞬間とその考えの性質を、克明に表していると推察される。言い換えれば、以上の記述は、考えの生成という視点から、対話の成り立ちを描写しているのではないだろうか。

## 考察

### (1) 哲学対話における生成

前章では、哲学対話の特徴と対話の成り立ちについて論じてきた。本節では、生成というキーワードをもとに、これまでの議論をまとめたい。繰り返しになるが、生成とは、対話の中で、あるいは対話を通じて、なにかが生み出され続けていくことを指し示すための言葉である。

哲学対話が生成するのは、まず独特の空間であろう。具体的には、参加者に安心感や自由さを感じさせる空間である。参加者が一堂に会した瞬間、そのような空間が生成されるとは考えにくい。さらに、参加者の発言や態度によっても、空間の雰囲気は一変するだろう。そのため、参加者に安心感や自由さを感じさせる空間は、時間の流れと参加者間の相互作用の中で、生成されるといえよう。また、参加者が共にする時間が長いことも、安心感や自由さを感じさせる空間が生成される一因となっている可能性がある。そして、そのような空間が参加者に自由な発言を促し、対話の流れが生成されていくと考えられる。

そして、哲学対話においては、参加者個人に気づきが生じ、新しい考えや思いが生成されうる。哲学対話の中では、参加者どうしの対話だけでなく、参加者個人における、過ぎ去った対話の内容や過去の自分との対話といった、様々な水準での対話が生じうる。そのような対話が、参加者個人を触発することで、新しい考えや思いが生じうると考えられる。ただ、一度生じた考えや思いであっても、暫定性を持っており、対話の中でさらに変化し

うる。

さらに、哲学対話における新しい考えや思いの生成は、参加者個人に限った現象ではないことも指摘できよう。参加者どうしが相互に触発し合いながら対話することで、語られた個人の考えが変奏、肉付けされ、複数の参加者に共有されうる、さらに新しい考えに成っていく。そしてその考えは、個人の気づきや考えを超えた新しいものであり、さらなる変化の可能性も持つと考えられる。

前章の分析および、本節の考察を端的にまとめたい。哲学対話においては、安心感や自由さを感じさせる空間が生成され、その中で対話の流れも生成する。そして、その空間および流れの中でなされる、様々な水準での対話は、個人に気づきをもたらし、新しい考えや思いが生成される。さらに、対話の中で表明された個人の考えが変奏、肉付けされることで、個人の範囲を超えた新しい考えや思いの生成も生じうるのである。以上が、哲学対話の特徴であり、その成り立ちである。

## (2) 哲学対話とその意義について

続いて、哲学対話をもたらした新しい考えの意義について考察する。対話コンポが、ある問題について理解し、なんらかの形でその解決を目指すものであるならば、第3コンポによって生み出された考えが、どのような社会的意義を持つか考察する必要があるだろう。そしてこの考察は、哲学対話そのものの意義に関する検討にも結びつくと考えられる。

本研究で取り上げた新しい考えは、「〔妊娠・出産について〕安心してためらえる社会」と端的に表されるだろう。「ためらってもいい」という、ためらいへの理解や許容が実現しているだけでなく、ためらいが生じた「その後」のサポートも存在するからこそ、「安心してためらえる社会」は成り立つのであろう。前章では、以上のような考えが、対話を通じ生成される様子が示された。

そしてこの考えは、少子化対策が推し進められている本邦の現状を考える上で、示唆に富むものではないだろうか。少子化対策が進められられる一方で、子どもを産み育てる選択のみが是とされる価値観が広まり、妊娠・出産に関するためらいが許容されないならば、それは一部の人々にとって大きな社会的圧力となりうるだろう。

実際に本邦の社会においては、母親となることを当たり前とみなす傾向があり、子どもを産むことへの圧力が存在していると指摘されている（大日向、2000）。また、不妊や不妊治療というテーマに注目すれば、生殖技術の進歩や普及に伴い、不妊治療を通じて、子どもを持つために努力をし続けることを当然とする価値観が広まっているという指摘もある（安田、2006）。さらに、子どもを持つことを当然視し、子どもを持たないことをかわいそうなことと一様に判断するような偏見が存在する中、少子化対策の名目のもと、無批判に不妊治療を推進していく社会に疑問を呈する意見も提示されている（拓殖、2022）。

大日向（2000）や安田（2006）、拓殖（2022）が指摘するような状況が生じる背景の一つとして、妊娠・出産に関するためらいへの理解や許容の不在が挙げられるのではないだろうか。妊娠・出産は大きなライフイベントであり、そこには当然、様々なためらいが生じうる。しかし、子どもを持つことを当然視するならば、そのようなためらいは理解も許容もされない可能性がある。さらに、不妊という状況に際し、治療を是として推し進めるならば、妊娠および治療へのためらいについても、理解も許容もされないかもしれない。そし

てそのような社会および状況が、妊娠・出産に悩む当事者に大きな圧力をかけるであろうことは、想像に難くない。

本研究で取り上げた哲学対話において生成された、「〔妊娠・出産について〕安心してためらえる社会」という考えは、上記のような圧力が生じている可能性がある本邦の社会について再考する上で、重要なポイントを提供していると考えられる。「ためらってもいい」と妊娠・出産に悩む当事者に感じさせる状況を生み出すことは、上記のような社会状況への具体的な対策を考える上で、大きなヒントとなりうるのではないだろうか。そして、そのような考えが生成されうる点に、哲学対話の意義を見出すことができるだろう。

また、「安心してためらえる」状況については、社会全体を通じての実現はすぐには難しくとも、当事者を取り巻く小さな社会においては、実現しうる可能性が考えられる。その意味で、「〔妊娠・出産について〕安心してためらえる社会」という考えは、理想論にとどまらないものであるといえよう。さらに、「ためらってもいい」という考えがありうると知ることそのものが、参加者の考えの変化や行動を促し、小規模であっても「〔妊娠・出産について〕安心してためらえる社会」が実現していく第一歩になる可能性も指摘できる。哲学対話は、新しい考えを発見するだけでなく、その実現に向けた第一歩ともなりうるのである。

以上のように、「〔妊娠・出産について〕安心してためらえる社会」という考えは、少子化対策が推し進められている本邦の現状を再考する上で、重要なポイントとなりうる。もちろん、参加者全員が、以上のような考えをあらかじめ持ち、それを主張するために対話に臨んでいたわけではないだろう。「〔妊娠・出産について〕安心してためらえる社会」という考えは、哲学対話の中で、参加者同士が様々な形で触発された結果、生成された考えである。そして、自然発生的に以上のような考えが生じうる点に、哲学対話の持つポテンシャルと意義が示されていると考えられる。

### (3) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、参加者の発言全てを掬い取れているわけではなく、それゆえ、哲学対話の特徴や成り立ちを、網羅的に記述したものではないことを明記しておく。対話に際しては、様々な場面ややり取りが生じているため、その特徴や成り立ちについても、様々な可能性がありうるだろう。また、対話におけるファシリテーターの働きについても、考察すべき論点として残されている。以上の点は、本研究の限界であり、今後の研究課題である。

また、本研究が対話コンポという、独自性を持った哲学対話を取り上げている点についても、留意点を述べておく。前述のように、対話コンポというプログラムは、他の哲学対話と異なる独自性を持ったものである。そのため、本研究における指摘が他の哲学対話に当てはまらない可能性がある点は、指摘しておく必要があるだろう。対話コンポと他の哲学対話における特徴や成り立ちの違いも、今後の研究課題である。ただ、対話コンポも哲学対話という実践の一種であるのだから、本研究を通じ、哲学対話に関する理解の一可能性を示すことはできたのではないかと期待している。

### 謝辞

本研究は、JST 共創の場形成支援プログラム JPMJPF2108 の支援を受けたものです。また、

論文化に際し丁寧なコメントをいただいた、哲学相談おんころ代表理事の中岡成文先生、哲学プラクティショナーの松川えりさんに感謝申し上げます。

### 〈引用文献〉

- 堀江 剛 (2017) ソクラテック・ダイアログ——対話の哲学に向けて. 大阪大学出版.
- 三和秀平・青山拓実・解良優基・山本大貴 (2022) なんで勉強しなきゃいけないの? という問いの哲学対話が学習動機づけに与える効果. 思考と対話, 4, 48-61.
- 村上靖彦 (2013) 摘便とお花見——看護の語りの現象学. 医学書院.
- 村上靖彦 (2016) 仙人と妄想デートする——看護の現象学と自由の哲学. 人文書院.
- 村瀬智之 (2022) 「哲学に関わる対話的手法」を用いた公民科授業づくりの試み——「媒介教材を用いた授業」を事例として. 思考と対話, 4, 12-23.
- 中岡成文・堀江 剛 (2004) 〈在宅における医療行為〉をめぐる対話の試み. <http://clinicaethics.ne.jp/cleth-prj/conference/04abst/4124nakaoka.html> (情報取得 2023/6/16)
- 大日向雅美 (2000) 母性愛神話の罫. 日本評論社.
- 栢植あづみ (2022) 生殖技術と親になること——不妊治療と出生前検査がもたらす葛藤. みすず書房.
- 安田裕子 (2006) 女性が不妊治療を選択するという事——治療をやめる選択肢をみすえて. 教育方法の研究, 9, 9-16.